

幼児期における「大人になったらなりたいもの」と時間認識の関連

濱田 祥子¹

The Developmental Relationship between “What Children Want to be When They Grow up” and Time Perception in Early Childhood

Shoko HAMADA¹

Abstract: The present study aimed to investigate the developmental relationship between “what children want to be when they grow up” and time perception in early childhood. The researcher questioned 88 participants (aged from four to six) about two “something to want to be” and time perception. The results showed that, as age increased, realistic answers increased for “something to want to be,” as did a reason and a way change into a social role and an effort. Time perception became more accurate as age increased, but future perception was difficult for six-year-olds. The answers for “something to want to be” were more realistic for children with a higher time perception score. These results suggest that children may assume possible self by acquiring perception of time.

Key words: something to want to be when children grow up, time perception, possible self, preschoolers

目 的

幼児に対する「大人になったら何になりたいの？」という質問は、多くの人が尋ねられたり、尋ねた経験があるだろう。尋ねた側は、興味・関心などその子らしさを知る手立てとし、成長を実感したり、可愛らしく思ったりする。では、この質問の回答は発達的には何を表しているのだろうか。

幼児に「大人になったらなりたいもの」を尋ねた研究はいくつかある。森（1995）や富田（2004）は、4歳児、5歳児、6歳児を対象とし、その回答を空想と現実の観点から考察している。その結果、森（1995）の研究では、4歳児の60%、5歳児の33%、6歳児の10%が動植物やキャラクターなど実現不可能なものを挙げ、実現不可能なものを挙げた幼児のほとんどが本当になれると信じていることが示された。また、

富田（2004）の同様の質問においては、4歳児の65%、5歳児の63%、6歳児の25%が非現実的なものを挙げていた。数値の差はあるが、いずれの研究の結果も加齢とともに「大人になったらなりたいもの」は非現実的なものから現実的なものへと変化することが分かっている。この変化について、森（1995）と富田（2004）は幼児の回答に対して、本当になれると思うか否か、他の子がなりたいと思っただけになれると思うか否か、どうしたらなれると思うかといった問いをし、非現実的なものに本当になれると信じているのか、またなれるとしたらどのような条件があると考えているかという空想／現実という観点から検討した。そして、その結果から、幼児期は加齢と共に空想と現実の境界を徐々に確立していくと結論づけた。しかしながら、いずれの研究においても、そもそも幼児は「大人になったら何になりたいの？」という質問に対して、未来を想定して回答しているのだろうかという疑問を挙げている。

1 比治山大学

Markus & Nurius (1986) は未来における自己概念を、可能自己 (possible self) と定義している。可能自己とは、将来かくありたいと願う自己 (希望自己)、将来そうなるであろう自己 (予期自己)、将来そうなりたくないと願う自己 (不安自己) という3側面があり、これらは動機づけやそれに伴う感情を表象するものとして重要であると述べている。「大人になつたらなりたいたいの」は、幼児が未来の自己を想定している場合は可能自己を表しているといえるが、未来を想定していない場合は可能自己を表しているとはいえない。このことから、幼児期の「大人になつたらなりたいたいの」は、空想/現実という観点だけではなく、未来を想定しているか否かという観点の考察も必要である。

時間的視点を考慮した自己について、Neiseer (1988) は時間的拡張自己 (temporally extended self) を提起している。時間的拡張自己は、過去、現在、未来の自己の状況を相互に結びつけ、時間的に一つの連続体をなすものとして認識される自己である。幼児期における時間的拡張自己を取り扱った研究は、リアルタイムではなく遅れて提示された自己の姿を自己と認識できるか否かを主題に検討している (Povinelli, Landau & Periloux, 1996; 木下, 2005)。その結果、4歳頃に時間的に連続した自己が獲得されることが分かっている。これらの研究は、数時間や数日といった短期間の時間的連続性を検討しているため、認知発達の側面が強調され、赤ちゃんから大人になるという長期間の時間的連続性とは測定しているものが異なる。しかしながら、短期間の時間的拡張自己が獲得されなければ、大人になった自己、すなわち可能自己を想定することは困難であると予想される。

幼児期を対象とした時間理解に関する研究は、朝・昼・晩、曜日、月、季節といった慣用的時間概念 (conventional time concept) の研究がある。幼児期の慣用的時間概念は、4歳児で時間パターンを出来事の順序を利用して推論する (言語リスト処理) ことができ、5歳児で空間的イメージに置き換えて推論する (イメージ・システム処理) ができるようになることが示唆されている (Friedman, 2005; 丸山, 2004)。これは、一日の流れや年間行事について、4歳頃にはその順序を理解することはできるが、それぞれの出来事の間隔や、逆行して捉えること、循環性を十分に表象することは5歳頃までは難しいということである。慣用的時間概

念は、循環的な時間についての理解を研究したものであり、過去や未来という一方向に進む時間とは異なるといえよう。しかし、参照すべきは、時間認識を検討するにあたり、時間帯や暦、行事などの社会体系的な定義を用いている点と、その発達を言語リスト処理とイメージ・システム処理という枠組みから捉えている点である。

過去・現在・未来という一方向に進む時間軸における自己を捉える際に、人間の成長段階という指標は同様に用いようとする。濱田・杉村 (2011) が、幼児に5つの成長段階 (赤ちゃん・幼児・小学生・大人・老人) の人物の顔写真カードを成長順に配列させた課題では、全てを正しく配列できたのは年少児22%、年中児43%、年長児96%であった。この課題は、顔写真から成長段階を推測する必要があり、成長段階の順序の理解のみを取り扱っているとはいえないが、時間軸における人間の変化を理解することは6歳までに発達すると予想される。しかし、この課題は、慣用的時間概念の研究から捉えると、言語リスト処理のみを扱っている。それぞれの成長段階の距離を推論するためには、イメージ・システム処理が必要となるのではなかろうか。特に、慣用的時間は循環する暦や行事を扱っているため、過去の経験を手がかりに推測することができるが、未来の成長段階は経験を手がかりにすることができず、その距離を推測することはより困難であると予想される。

未来を想定するためには、時間認識をもつ必要がある。物理的には、時間は一定の速度で一方向に進む。そのため、時間は巻き戻すことも早送りすることもできない。すなわち、私たちは過去に戻ったり、物理的に連続していない未来の時点に行くことはできないのである。成長段階を幼児の視点で考えるならば、赤ちゃんに戻ることはできないし、明日大人になることはできないのである。先行研究の結果から、自己は時間的に連続するという時間的拡張自己は4歳頃に獲得し始めることが示されており、幼児から大人という長期的なスパンにおける時間的拡張自己の獲得は4歳児以降であると推測される。また、6歳頃には成長段階の順序を理解していることが示されているが、不可逆性や時間的距離については明らかではない。人間は赤ちゃんから大人になるという成長段階の順序的理解と、幼児は赤ちゃんには戻れないこと、大人になるまでには時間がかかることの理解は異

なる。赤ちゃんに戻れる、あるいはすぐに大人になれると考える幼児と、赤ちゃんには戻れない、あるいは大人になることには時間がかかる、あるいは大人になることには時間がかかると考える幼児とでは、現在の自己と未来の自己の時間的広がり異なり、「大人になったらなりたいもの」の意味づけの様相が違うのではなからうか。

以上から、本研究では、幼児期の「大人になったらなりたいもの」と赤ちゃんには戻れないし、すぐ大人になることはできないという時間認識の関連を検討し、「大人になったらなりたいもの」の発達の意味を探ることを目的とする。

方法

調査対象児 年少児25名(男児14名, 女児11名; 平均年齢4歳1ヶ月), 年中児30名(男児17名, 女児13名; 平均年齢5歳2ヶ月), 年長児33名(男児18名, 女児15名; 平均年齢6歳1ヶ月), 計88名。

手続き 幼児に対する質問は、保育所の1室で個別に行った。質問項目は以下の順に実施した。

(1) 「大人になったらなりたいもの」「大人になったらなりたいもの」とその理由、方法を尋ねる3項目を設けた。

なりたいもの「○○くん(ちゃん)は大人になったら何になりたいのかな?」

理由「どうして○○になりたいのかな?」

方法「どうしたら○○になれるのかな?」

(2) **時間認識課題** 時間認識課題として、過去・未来の2つの時間について、それぞれストーリーの登場人物、対象児本人、調査者の3対象について尋ねた。質問数は2(時間)×3(対象)の6項目であった。

過去認識課題 図版を見せながらストーリーを教示した後、質問をした。ストーリーの内容は、赤ちゃんの姿を見て羨ましがり、赤ちゃんに戻りたいと思っている幼児(年齢は対象児と同年齢)(男児版はケンタくん, 女児版はハナちゃん)が登場する。登場人物の「そうだ。赤

ちゃんに戻ればいいんだ。」というセリフを読み上げた後、「ケンタくん(ハナちゃん)は赤ちゃんに戻れるかな?戻れないかな?(紙芝居の登場人物)」と尋ねた。その次に、「○○くん(ちゃん)は赤ちゃんに戻れるかな?(対象児本人)」、「私(調査者)は赤ちゃんに戻れるかな?(調査者)」と尋ねた。

未来認識課題 図版を見せながらストーリーを教示した後、質問をした。ストーリー内容は、大人の姿を見て羨ましがり、早く大人になりたいと思っている幼児(年齢は対象児と同年齢)(男児版はケンタくん, 女児版はハナちゃん)が登場する。登場人物の「そうだ。今すぐ大人になればいいんだ。」というセリフを読み上げた後、「ケンタくん(ハナちゃん)は今すぐ大人になれるかな?なれないかな?(紙芝居の登場人物)」と尋ねた。その次に、「○○くん(ちゃん)は今すぐ大人になれるかな?なれないかな?(対象児本人)」、「私(調査者)は今すぐ大人になれるかな?(調査者)」と尋ねた。

結果

(1) 「大人になったらなりたいもの」

なりたいもの「大人になったらなりたいもの」の回答は、大人になったときになり得るものを「現実的」、なり得ないものを「非現実的」、決めていないというものを「未定」の3カテゴリに分類した。「現実的」カテゴリには、「ケーキ屋さん」「サッカー選手」などの職業や「お母さん」などの役割が含まれた。「非現実的」カテゴリには、「仮面ライダー」「プリキュア」などの空想的なもの、「電車」「ボール」などの人間ではないものなどが含まれた。「未定」カテゴリは、「まだ決めていない」「迷っている」というように確定したものがないものが含まれた。年齢と性別ごとの「大人になったらなりたいもの」カテゴリの人数を Table 1 に示す。 χ^2 検定の結果、年齢、性別ともに有意差が認められた(年齢; $\chi^2(4)=21.45, p<.01$, Cramer's V=.35,

Table 1 「大人になったらなりたいもの」の回答(%)

	年 齢			性 別	
	年少児 (n=25)	年中児 (n=30)	年長児 (n=33)	男児 (n=49)	女児 (n=39)
現実的	10 (40.0)	15 (50.0)	30 (90.9)	25 (51.0)	30 (76.9)
非現実的	8 (32.0)	11 (36.7)	3 (9.1)	17 (34.7)	5 (12.8)
未定	7 (28.0)	4 (13.3)	0 (0.0)	7 (14.3)	4 (10.3)

性別； $\chi^2(2)=6.77, p<.05, \text{Cramer's } V=.28$ 。残差分析の結果、年齢については、年長児はその他の年齢よりも「現実的」回答が多く、年少児はその他の年齢よりも「未定」という回答が多いことが示された。また、性別については、男児は女児よりも「非現実的」回答が多く、女児は男児よりも「現実的」回答が多いことが示された。**理由** 「大人になったらなりたいたいもの」の回答が「未定」であった11名を除く77名を対象に、その理由を4つのカテゴリに分類した。1つ目は「好意・憧れ」であり、「好きだから」「格好いいから」など、対象への好意的な感情を理由とするものが含まれた。2つ目は「役割」であり、「みんなを喜ばせたいから」「美味しいケーキを沢山作りたいから」など、社会貢献や仕事内容を理由とするものが含まれた。3つ目は「その他」であり、上記2カテゴリ以外の理由が含まれた。具体的には、「テレビで見たから」「なりたいたいから」「ママがやってるから」等が含まれた。4つ目は「分からない」で、「分からない」という回答や無回答が含まれた。年齢と性別、「大人になったらなりたいたいもの」それぞれの理由カテゴリの人数を Table 2 に示す。 χ^2 検定の結果、年齢、性別、「大人になったらなりたいたいもの」いずれにも有意傾向が認められた（年齢： $\chi^2(6)=11.31, p<.10, \text{Cramer's } V=.27$ 、性別： $\chi^2(3)=6.29, p<.10, \text{Cramer's } V=.29$ 、「大人になったらなりたいたいもの」： $\chi^2(3)=7.18, p<.10, \text{Cramer's } V=.31$ ）。残差分析の結果、年齢については、年少児はその他の年齢よりも「役割」を理由に挙げるものが少なく、「分からない」が多いこ

とが示唆された。性別については、女児は男児よりも「役割」を理由に挙げるものが多かった。「大人になったらなりたいたいもの」は、「現実的」群は「役割」を、「非現実」群は「好意・憧れ」を理由に挙げるものが多かった。

方法 理由と同様、「大人になったらなりたいたいもの」が「未定」の11名を除く77名を対象に、なりたいたいものになるための方法を3つのカテゴリに分類した。1つ目は「成長」であり、「大きくなったら」「ごはんいっぱい食べたら」などの成長に関する回答が含まれた。2つ目は「努力」であり、「練習する」「訓練して上手になる」などの技能習得や上達に関する努力に関する回答が含まれた。3つ目は「分からない」で、「分からない」や無回答が含まれた。年齢と性別、「大人になったらなりたいたいもの」それぞれの方法カテゴリの人数を Table 3 に示す。 χ^2 検定の結果、年齢と「大人になったらなりたいたいもの」において有意差が認められた（年齢： $\chi^2(4)=19.27, p<.01, \text{Cramer's } V=.35$ 、「大人になったらなりたいたいもの」： $\chi^2(2)=10.24, p<.01, \text{Cramer's } V=.37$ ）。残差分析の結果、年齢では、年長児はその他の年齢よりも「努力」を挙げる者が多く、年少児ではその他の年齢よりも「分からない」と回答する者が多いことが示された。「大人になったらなりたいたいもの」では、「現実的」群は「努力」を、「非現実敵」群は「分からない」を挙げる者が多かった。

(2) **時間認識課題** 過去認識課題は、赤ちゃん（過去）に戻れるかという質問の回答について、「戻れる」と回答した場合は0点、「戻れな

Table 2 「大人になったらなりたいたいもの」の理由 (%)

	年 齢			性 別		大人になったらなりたいたいもの	
	年少児 (n=18)	年中児 (n=26)	年長児 (n=33)	男児 (n=42)	女児 (n=35)	現実的 (n=55)	非現実的 (n=22)
好意・憧れ	9 (50.0)	13 (50.0)	14 (42.4)	20 (47.6)	16 (45.7)	21 (38.2)	15 (68.2)
役割	0 (0.0)	5 (19.2)	9 (27.3)	4 (9.5)	10 (28.6)	13 (23.6)	1 (4.6)
その他	5 (27.8)	7 (26.9)	9 (27.3)	13 (31.0)	8 (22.9)	17 (30.9)	4 (18.2)
分からない	4 (22.2)	1 (3.9)	1 (3.0)	5 (11.9)	1 (2.9)	4 (7.3)	2 (9.1)

Table 3 「大人になったらなりたいたいもの」になるための方法 (%)

	年 齢			性 別		大人になったらなりたいたいもの	
	年少児 (n=18)	年中児 (n=26)	年長児 (n=33)	男児 (n=42)	女児 (n=35)	現実的 (n=55)	非現実的 (n=22)
成長	6 (33.3)	11 (42.3)	9 (27.3)	14 (33.3)	12 (34.3)	18 (32.7)	8 (36.4)
努力	1 (5.6)	6 (23.1)	19 (57.6)	15 (35.7)	11 (31.4)	24 (43.6)	2 (9.1)
分からない	11 (61.1)	9 (34.6)	5 (15.1)	13 (31.0)	12 (34.3)	13 (23.6)	12 (54.5)

い」と回答した場合は1点とした。紙芝居の登場人物、対象児本人、調査者の3対象に対する回答を合計し、過去認識課題の得点範囲は0～3点であった。未来認識課題は、大人（未来）にすぐなれるかという質問の回答において、紙芝居の登場人物と対象児本人については、「すぐなれる」と回答した場合は0点、「すぐなれない」と回答した場合は1点とした。調査者は成人だったため、調査者についての質問では、「すぐなれる」あるいは「もうなっている」と回答した場合は1点とし、「すぐなれない」と回答した場合は0点とした。紙芝居の登場人物、対象児本人、調査者の3対象に対する回答を合計し、過去認識課題の得点範囲は0～3点であった。

年齢ごとの過去と未来の時間認識課題の得点を Table 4 に示す。年齢（年少児・年中児・年長児）×時間（過去・未来）の2要因分散分析の結果、年齢と時間の主効果、交互作用がいずれも有意であった（年齢： $F(2,85)=12.03, p<.001, \eta_p^2=.22$ 、時間： $F(1,85)=34.29, p<.001, \eta_p^2=.18$ 、交互作用： $F(2,85)=9.63, p<.001, \eta_p^2=.23$ ）。交互作用が有意であったため、年齢と時間それぞれの単純主効果を検定した。その結果、年中児と年長児における時間の単純主効果が有意であった（年中児： $F(1,85)=15.72, p<.001$ 、年長児： $F(1,85)=44.50, p<.001$ ）。つまり、年中児と年長児は過去認識得点は未来認識得点よりも高いことが示された。また、過去認識における年齢の単純主効果が有意であり（ $F(2,85)=21.00,$

$p<.001$ ）、未来認識における年齢の単純主効果は有意傾向が示された（ $F(2,85)=2.41, p<.10$ ）。多重比較の結果、過去認識において、年少児は年中児と年長児より得点が低く（年中児： $F(1,85)=22.32, p<.001$ 、年長児： $F(1,85)=39.90, p<.001$ ）。未来認識において、年少児は年中児、年長児より得点が低い傾向が認められた（年中児： $F(1,85)=3.96, p<.01$ 、年長児： $F(1,85)=3.52, p<.01$ ）。これらの結果から、年少児は過去認識と未来認識の得点の差はなく、どちらも他の年齢と比較して低く、年中児と年長児は過去認識は未来認識よりも高いことが示唆された。

(3) 「大人になったらなりたいもの」と時間認識の関連 「大人になったらなりたいもの」のカテゴリごとの時間認識得点を Table 5 に示す。「大人になったらなりたいもの」と時間認識の関連を検討するために、カテゴリ（現実的・非現実的・未定）×時間（過去・未来）の2要因分散分析を行った結果、カテゴリと時間それぞれの主効果が有意であった（カテゴリ： $F(2,85)=9.18, p<.001, \eta_p^2=.18$ 、時間： $F(1,85)=16.48, p<.001, \eta_p^2=.16$ ）。カテゴリについて多重比較を行ったところ、「現実的」群と「非現実的」「未定」群の時間認識得点に有意差が認められた。これらの結果から、「現実的」群は過去・未来に関わらず、「非現実的」群と「未定」群と比較して時間認識得点が高いことが示された。

各セルの人数が少なく、0名のセルもあったことから、3要因分散分析は実施しなかったため、上記の分析に加え、年齢別に「大人になっ

Table 4 各年齢の時間認識得点の平均値

		年齢				F 値		
		年少児	年中児	年長児	全体	年齢	時間	交互作用
過去認識	平均	1.60	2.60	2.91	2.43	12.03 **	34.29 **	9.63 **
	SD	(1.26)	(0.62)	(0.29)	(0.94)			
未来認識	平均	1.60	2.03	2.00	1.90	12.03 **	34.29 **	【年中・年長】未来<過去 【過去】年少<年中・年長
	SD	(1.04)	(0.72)	(0.66)	(0.84)			

* $p<.05$ 、** $p<.01$

Table 5 「大人になったらなりたいもの」カテゴリごとの時間認識得点の平均値

		大人になったらなりたいもの			F 値		
		現実的群	非現実的群	未定群	大人になったらなりたいもの	時間	交互作用
過去認識	平均	2.71	2.09	1.73	9.18 **	16.48 **	0.69
	SD	(0.63)	(1.23)	(1.10)			
未来認識	平均	2.11	1.59	1.45	9.18 **	16.48 **	0.69
	SD	(0.66)	(0.91)	(1.04)			

* $p<.05$ 、** $p<.01$

たならんたいもの」のカテゴリ（現実的・非現実的・未定）×時間（過去・未来）の2要因分散分析を行った。その結果、年少児において、カテゴリの主効果が有意であり（ $F(2,22)=7.75$, $p<.001$, $\eta_p^2=.41$ ）、多重比較を行ったところ、「現実的」群と「非現実的群」「未定群」の時間認識得点に有意差が認められた（それぞれの過去認識・未来認識の平均値（SD）：「現実的」群2.40（1.08）、2.40（0.70）；「非現実的」群1.00（1.31）、0.88（0.64）；「未定」群1.40（0.90）、1.29（1.11））。つまり、年少児においては、「現実的」群は過去・未来に関わらず、「非現実的」群と「未定」群と比較して時間認識得点が高いということが示された。

まとめ

本研究では、幼児期の「大人になつたらんたいもの」と時間認識の関連について検討することを目的とした。

「大人になつたらんたいもの」について、加齢とともに現実的なものを挙げる者が増え、割合は異なるが、森（1995）や富田（2004）の結果と一致した。なりたいたい理由については、現実的なものを挙げた者は社会的な役割や仕事内容を挙げ、非現実的なものを挙げた者は対象への好意的感情を挙げた。また、なりたいたいものになるための方法は、現実的なものを挙げた者はそこまでの過程における努力を挙げ、非現実的なものを挙げた者は分からないと答える者が多かった。つまり、加齢とともに「大人になつたらんたいもの」は非現実的なものから現実的なものへと変わり、その理由や方法も社会的役割の視点や練習や訓練といった過程について言及するようになることが分かった。

続いて、時間認識について、各セルの偏りが大きく、0値があったことから時間認識×年齢×「大人になつたらんたいもの」カテゴリの3要因分散分析をせず、2要因ずつの分析をした。それぞれの結果を総合すると、時間認識は年少児にとっては過去認識も未来認識も年中児・年長児と比較して困難であり、年中児・年長児は、過去認識と比較して未来認識が難しいことが示された。この結果から、年中児頃に赤ちゃんには戻れないという理解が発達し、今すぐ大人にはなれないという理解は年長児でも十分ではないということが示唆された。成長段階を順に並べる課題は年長児のほとんどが正答であった（濱田・杉村, 2011）ことと比較すると、

現在の自己と未来の自己である大人との時間的距離を捉えることの方が難しいのかもしれない。このことは、慣用的時間概念において言語リスト処理がイメージ・システム処理よりも先に獲得されることと類似している。成長段階という一方向に進む長期的な時間に伴う変化についても、その順序が先に理解され、それぞれの時間的距離や不可逆性の理解が後に続くのかもしれない。

また、「大人になつたらんたいもの」と時間認識の関連では、「大人になつたらんたいもの」について現実的なものを答えた幼児は、非現実的なものを答えた幼児や決めていないという幼児と比較して、過去認識も未来認識も得点が高かった。他の年齢と比較して時間認識得点が高い年少児でも、現実的な回答をした幼児は、その他の回答をした幼児よりも時間認識得点が高かった。つまり、年少児であっても時間認識が正しい場合、時間的に遠い未来の自分を想定している可能性がある。これらの結果から、赤ちゃんには戻れないし、今すぐ大人にはなれないという時間認識をもつ幼児は、「大人になつたらんたいもの」を問われた際に、時間的に遠い未来の自己を想定し回答していることが推測される。一方、大人にすぐなれると考えている幼児は、「今なりたいたいもの」を答えているのかもしれない。つまり、時間認識の高い幼児の回答は可能自己を表し、時間認識の低い幼児の回答は現在の変身願望が反映されている可能性がある。時間的に遠い未来の自己を想定することが、非現実的な回答が減少していくことに何らかの影響を与えているのかもしれない。

今後の課題

まず、大人になつたらんたいものカテゴリ分類の観点が挙げられる。本調査は、森（1995）や富田（2004）の分類に倣い、空想と現実という観点でカテゴリ分類をした。森（1995）は、回答したものについて本当になれると思うか否かを尋ねており、「なれない」と回答した者は、現実的なものを挙げた70名のうち3名（4.3%）、非現実的なものを挙げた41名うち5名（12.2%）であった。このことから、非現実的群、現実的群それぞれの回答は幼児がなりたいたいと思っており、大半の者が本当になれると思っているものとして解釈できよう。しかしながら、実際の実現可能性で考えると、現実的群に分類されたサッカー選手と非現実的群に分類された仮面ラ

ライダーを、それぞれプロのサッカー選手になることと仮面ライダーの俳優になることと捉えるならば、実現可能性の点においては同じであるかもしれない。将来の職業や社会的役割としての実現可能性の観点で分類した場合、結果が異なる可能性がある。

加えて、本調査で取り扱ったものが真に時間認識であるかという点において課題が残る。時間認識課題として設定した課題は、過去認識課題は「赤ちゃんには戻れない」、未来認識課題は「今すぐ大人には戻れない」ということにとどまり、ここで取り扱っているのは成長段階の不可逆性や距離判断である。自己は時間軸上で連続したものであり、時間の流れとともに変化することの認知的理解の検討においては、遅延提示された自己に対する認識や、経験したことの無い状況を想定して現在とすべき行動を選択するといった方略を用いて研究がされている(木下, 2005; 吉田, 2011)。本調査では、発達段階である「赤ちゃん」と「大人」を用いて、現在の自己はそれらとは異なり、ある発達段階に戻ることをやすぐになることはできないということの理解を検討した。この課題は、自己は一方向に進む時間軸上にあり、過去には戻れないし、未来に早送りすることもできないという時間認識の一側面にすぎない。

課題の内容においては、未来認識課題における「今すぐ」という表現が主観的である点は、結果の解釈において考慮すべきである。例えば、20年後が「今すぐ」であるか否かは個人によって異なる。慣用的時間概念のように、ある出来事と出来事の間隔を処理するような判断を用いた課題を用いて検討する必要がある。例えば、現在から小学生になることと大人になることはどちらが近いかなどである。また、未来認識課題の3対象のうち、調査者はすでに成人しているという点において異質であった。これを単純に過去認識と未来認識と区別してよいのかという問題がある。幼児を対象に、顔写真で年齢の上下判断をさせた中島(2002)や、様々な成長段階の写真を並べ、親と同じ成長段階の顔写真を選ばせた濱田(2011)の結果では、顔写真で正しく大人を判断できるのは概ね年長児であることが示されている。本研究は顔写真ではなかったが、調査者を大人と判断できるか否かが回答に影響を及ぼし、過去認識と未来認識が質的に異なっている可能性もある。

更に、森(1995)や富田(2004)のように、

空想／現実の理解との関連については検討しなかった。「大人になったらなりたいもの」の回答を、現実的、非現実的という観点で分類する場合、今回取り扱った時間認識と空想／現実の理解のどちらもが関連しており、それぞれを交えた検討も必要である。加えて、分析においては、幼児の回答に基づいた群分けをしたため、データの偏りがあり、厳密な統計的分析ができなかった。今後は課題内容の検討や対象者を増やすなど、よりの確に実態を明らかにする方法論をとる必要があるだろう。

引用文献

- Friedman, W. J. & Lyon, T. D. (2005) Development of temporal-reconstructive abilities. *Child Development*, **76**(6), 1202-1216.
- 濱田祥子・杉村伸一郎(2011) 幼児における人間の成長段階についての認識. *幼年教育研究年報*, **32**, 125-132.
- 木下孝司(2005) 幼児期における時間的拡張自己と「心の理論」— 一時間的視点からの理論的考察— *心理科学*, **25**(1), 58-73.
- Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist*, **41**(9), 954-969.
- 丸山真名美(2004) 幼児期から児童期にかけての時間的処理能力の発達：生活時間構造の階層性の発達との関連 *認知心理学研究*, **1**(1), 35-43.
- 森加代子(1995) 幼児にとっての「大人になる」という現実. *奈良女子大学人間文化研究科年報*, **10**, 31-39.
- 中島伸子(2002) エイジングに伴う変化についての子どもの認識. *人間文化論叢*, **5**, 23-31.
- Neiseer, U (1988) Five kinds of self-knowledges. *Philosophical Psychology*, **1**, 35-59.
- Povinelli, D. J., Landau, K. R., & Perilloux, H. K. (1996) Self-recognition in young children using delayed versus live feedback: evidence of a developmental asynchrony *Child Development*, **67**, 1540-1554.
- 富田昌平(2004) 幼児期における「将来の夢」と空想／現実の区別認識. *幼年教育研究年報*, **26**, 105-113.
- 吉田真理子(2011) 幼児における未来の自己の状態についての予測：未来の不確実性への気づきと「心配」. *発達心理学研究*, **22**(1), 44-54.

謝 辞

調査にご協力くださった園児の皆さま，保育者の皆さま大変ありがとうございました。